

図書館へ行こう！

本を読んで、大学へ行こう

センター試験が終わり、本格的な入試シーズンがやってきました。読書と入試は遠いようで近い関係にあります。「読む」ことは、国語だけに限らずすべての教科に求められる力です。来年の人も5年後の人も、やがて来る入試本番を意識しながらワンランク上の読書を心がけてみましょう。

ワンランク上の読書のために

- なじみのない(違和感のある)文章に慣れましょう。
- 最近の作家だけではなく、少し昔の小説も読んでみましょう。
- 一度の読みでだいたいの流れを理解できるように。



- ◎新書を読もう。(裏面参照！！) よくわからなくても、読みづらくても、つねに読みかけの新書を手元に置いておきましょう。学院図書館には新書がたっぷりあります。
- ◎漱石、鴎外、龍之介…明治、大正、昭和の作家の小説を手にとってみよう。短編多数あり。

中学生も必見！今年のセンター試験から

(大学入試センター試験国語第一問)

沼野充義 めまのみつよし 1954年～、東京大学教授。スラヴ文学者、翻訳者。ロシア・ポーランド文学が専門。

「翻訳をめぐる七つの非現実的な断章」

『早稲田文学』[第8次](228), p76-83, 1995-05 早稲田文学会

翻訳家としての立場や経験をもとに、異なる文化や言語間で「翻訳」が抱える課題や難しさを述べた文章。

センター国語第1問(評論)は、翻訳について具体例を挙げつ

つ、やや随想調に論じた読みやすい文章でした。本文の傍線部

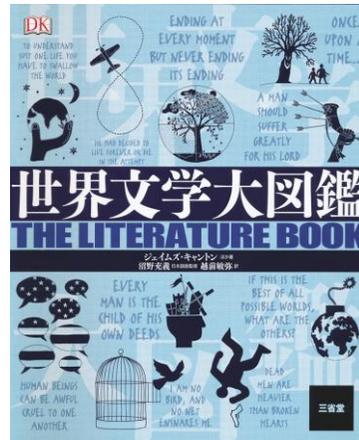
の趣旨や筆者の主張する内容を正確に把握するうえで硬質

な評論とはまた異なる難しさがあったと思います。問5では、

話し合っている五人の生徒のうち本文の趣旨と異なる発言を

選ぶ問題が出題されました。文章量は昨年より1割程度減少

し、約4,200字。



沼野充義氏の訳書のうち、学院図書館にはナボコフ著『賜物』や『世界文学大図鑑』↑があります



(大学入試センター試験国語第二問)

上林暁「花の精」(『星を撒いた街』より)

かんばやしあかつき 1902年-1980年、高知県出身、本名は徳廣巖城(とくひろ いわき)。心を病んだ妻を看取り、自身も二度の脳溢血で半身不随となりながらも震える左手で原稿を書き続け、優れた短編小説をいくつも残した文豪。市井の人々を静謐に見つめ、妻や自分の生きる小さな世界を端正な文章で描いた私小説家である。

植木屋が自宅の庭の月見草をねじ切る場面で始まるこの短編は、著者が書く「病妻物」のはしりとなった作品。冒頭の月見草のイメージが病気の妻を思う気持ちと重なり、美しく切ない。優れた風景描写にも注目したい小説である。

第2問(小説)は5年連続していた女流作家の作品ではなく、戦前(昭和15年)に発表された男性作家の作品が出題されました。会話の量は

昨年と同程度で客観描写が多く、読みやすい文章だったようです。設問の形式も例年通りで主人公の心情を問うものが主でした。約5,000字。

平成ベストセラー 平成三十年間(1989～2018)に文壇を彩ったベストセラー図書の数々を展示!! 昨年1位の吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』も堂々展示中です。